

第31回電気通信普及財団賞

テレコムシステム技術部門 総評

今年度もテレコムシステム技術賞、同学生賞に多くの方々から応募いただき、ありがとうございます。改めて、この賞を取り巻く研究活動が活発であることを実感させていただきました。

さて、応募のあった論文をアルゴリズム、無線、映像・メディア、音声、セキュリティ、ネットワークに分けて分析すると、以下の傾向になります。

先ず、アルゴリズムでは凸最適化といった基本問題の抜本的解決に向かった論文や、グラフ信号処理のような新しいシーズ中心の提案があり、技術の鼎を抑えた堅実な研究活動と感じました。音声は、藤崎モデルのパラメータ推定や発話検出のような基本手法の提案と並んで、多言語翻訳のようなシステム実証論文があるのが特徴です。セキュリティは、ABEを使ったプライバシーを配慮した放送事業向けシステム以外にも、ハードウェア型トロイの木馬や電子指紋符号を用いたデジタルコンテンツ保護技術等サービス指向の研究提案が多い。一方、映像・メディアは、三次元画像処理や符号化に混じって表示系や撮像素子といったシステムやデバイス系の論文に良いものも多く、来年度から応募の範囲にデバイス系も含める端緒になりました。これに対して、無線は、MIMOや無線LANを背景にしたテーマに、ネットワークも省エネPONやRFID等にテーマが集まり、テーマの展開にやや苦勞していると感じました。その中で、社会活動を圧縮するというユニークな論文が受賞することになったのは、以降の研究展開を期待したいと思います。

以上、現状における各分野の基本技術と実用化との間の立ち位置の違いが見え興味深いものがございます。

最後に、今年度までの募集要項の「材料・素子に関するものを除く」との規定は、昨今のデバイスとソフトウェアの融合状況を鑑み、来年度からは削除することにしました。次回からは、情報通信と関連する材料・素子の研究者も奮って応募されることを望みます。